
ヘタリア猫話 ？

花鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘタリア猫話？

【Nコード】

N7656X

【作者名】

花鳥

【あらすじ】

ねこたりあのいたねこがアーサーの家に。

と、一方でいぎねこがヴァルガス兄弟の家に転がり込んで普通に生活する・・・じゃないさせる話です。

第一話（前書き）

腐向け要素はありません・・・多分。

いたねこの名前が『フェリシアーノ』だと混乱するので、人フェリシアーノをそのまま『フェリシアーノ』

いたねこは『フェリ』で表記します。

いぎねこは『アルトゥーロ』、アーサーのイタリア読みです。

第一話

「ヴェー！待ってよー！！何で逃げるのー！！」

「にゃー！！」

俺、フェリシアーノ・ヴァルガス。可愛い女の子と美味しい食事が大好きなお茶目さんです♪そんな俺が一週間ぐらい前に猫を拾いました。雨の中、家の近くで寒そうに震えているのを見つけたんだけど・・・怪我してたから、助けたくて兄ちゃんに頼み込んで家で飼う事になったんだ。

「ふぎゃあ！？」

「ほら、捕まえたよ！さあ！アルトウーロ！ブラッシングしようね！！」

少しくすんだ金の毛並みに、エメラルドグリーンの綺麗な瞳、何故か太い眉毛・・・どこかあのアーサーに似てるなあと思って名前もアーサーのイタリア読みアルトウーロにしたんだ。

「にゃあ！！！！」

「うわあ！？暴れないでよ！！」

性格も凄くアーサーにそっくりだったんだよね。懐いてくれるまで時間が掛かったし・・・あつ、でも懐いてくれるととても優しいかったんだ。菊の『アーサーさんはご友人になるとても優しい方ですよ』って言った事が良く分かった気がする。そう言えば、フラン兄ちゃんがここに遊びに来てくれた時なんか大変で、警戒心剥き出し、近付こうものなら問答無用に飛び掛かって引っ掻き回してた・・・凄くこの辺アーサーっぽいよね・・・。後は薔薇が好きだったり、シャワーとかは好きなのにブラッシングが全然駄目とか・・・今もブラッシングしようと思ったなら逃げ出しちゃうし・・・ヴェー、捕まえるのも一苦労だよ。

「ヴェッ、アルトウーロ！すぐ終わるから！ちよっと我慢出来る？」
「・・・にゃあ」

渋々だけど、分かってくれたみたい。本当に懐いてくれると優しいし、凄く素直になってくれる。嫌な時は断固拒否してくるけど・・・基本的には凄く凄く従順だ。俺や兄ちゃんが会議とかで夜遅くに帰ってきてても玄関でじっと待っていてくれたり、何かあるとすぐすり寄ってきてくれたり・・・あれ？猫じゃなくて犬みたいだけど・・・。

「ヴェー、はい！終わったよ♪」

「まーお！！」

ヴェツヴェツ♪ほらほら、今も『お礼じゃないんだからな！俺の為だからな！！』と言ってるみたい。ヴェー、可愛いなあ♪

く所変わって、アーサー宅く

「ほら、飯」

「ヴェー♪」

数日前、正確な日にちは覚えていないが・・・まあ、数日前だ、茶色い猫を拾った。いや・・・違うな。実際はどこからか俺の家に入り込んだ猫が、そのまま家に住み着いている状態。毛並みが良かったから誰かが飼っていたと思ったんだが・・・誰かが飼っていたとか、探していたとか、そんな情報は全く持って皆無だった。仕方が無く、予防接種を済ませて俺が飼う事になったんだが。

「ヴェツ、ヴェツ！」

この猫・・・物凄くフェリシアーノにそっくりだった。鳴き声もよくフェリシアーノが言っている『ヴェー』だったし、薄い茶色の毛並みになると跳ねている癖毛・・・まさしくフェリシアーノのそれだろう。この世では似ている人間が三人いると聞いた事があるが、猫が人に似ているなんて聞いた事がない。

「にしても・・・本当に美味そうに食べるよな、お前」

「ヴェー♪」

性格もフェリシアーノにそっくりで、多少は人見知りをするが基本的には人懐っこく、グルメ（今食べてる飯も俺が色々買い漁って、

こいつが自分で選んだものだ)。俺には何だかんだで懐いてくれるようで・・・別に嬉しいなんて思っていないんだからな!・・・まあ、名前はそんなこんなでフェリシアーノから貰い『フェリ』と名付けた。

「ヴェッ!ヴェッ!」

そんな事を考えていたら、飯は食い終わってしまったらしい。俺の足下でくるくる歩き回りながら、何かを俺に訴えている。まあ、こいつが何を催促しているのかは、この数日間の間過ごしてきて見当はついてる。

「分かった、分かった。散歩だろう?」

「ヴェー♪」

そうだと言わんばかりに俺の肩に乗ってきた。ここが散歩の時のこいつの定位置らしい。久し振りに、と言うか俺の家では珍しく晴天だ。散歩に行くにはちょうど良いだろう。

「美味そうなモノがあっても、俺の側から離れるなよ?」

「ヴェッ!」

第一話（後書き）

ねこねここねこって称号が私の好きなゲームにありましてね・・・
ってまあそれはどうでも良いんですが！まず一話目です。こんな感
じで進みます。シリーズモノだとこの小説が第2弾だったと思いま
す。自分が携帯のメールのところで書いてた小説で・・・掘り出し
て書いていてとても懐かしい気持ちになりました。

第二話（前書き）

腐れ縁から見るとこんな感じ。&兄登場。

第二話

「ねえ、アーサー？お兄さんに言わせると凄ーく、凄ーく似合わないよ？」

「黙れ、クソ髭。何で来た？返答によってはぶち殺すぞ」

「何でってそりゃ・・・」

アーサーが猫を飼ったって聞いて冷やかしてやろうなんて、口が裂けても言えないよね。まあ、猫を見に来たというのは本当の話。元々動物に好かれる体質だったから、家に迷い込んできたとか、捨てられていた猫を見捨てられなかったんだとは思っただけど・・・まさか、フェリシアーノに似ているなんて誰が想像できようか。

「・・・」

意外だったとか、似合わないなんて全く口が裂けても言えない。絶対に殴られるか、半殺しに合うかしかない・・・それは避けたい。

「お兄さん、死にたくないし」

「ああ？何か言ったか？」

「イエ、何デモアリマセンヨ？」

「うぜえ、一発殴らせろ」

「理不尽っ!!」

そんな会話を繰り返している真っ直中でも、そのアーサーが飼った猫・・・フェリと名付けられた（付けた本人は恥ずかしくなったのか、殆どおいかお前としか呼ばない）子は、今もアーサーの膝の上。気持ちよさそうに眠っている。本当に冷やかそうと思って来たのに完全に拍子抜けだよな、これ。・・・あれ？そう言えば、前にフェリシアーノの家に遊びに行った時に、アーサーにそっくりな猫に思いつきり引っかけた記憶があるな・・・うん？デジャヴ????

「おい、早く帰れ。用は済んだんだろ」

「ええー、少しぐらいさー。『ゆっくりしていつてね!!』的なおもてなしはないの？」

「ほお、フランシス。お前は俺におもてなされたいのか？ちやうどここにさつき綺麗に磨いておいたナイフが・・・」

俺の言葉にアーサーはにやりと悪い笑みを浮かべると、どこから出てきたのか、銀色に輝く数本のナイフを弄んでいる。

「あのさ」

「あ？」

「理不尽とか、悪逆非道って言葉・・・知ってる？」

「知らねえ、早く帰れ。今からブラッシングの時間だ。」

「・・・ハイ」

猫にはデレデレなのね・・・そうね、死なないうちに帰るのが得策だね。

くところ変わって、ヴァルガス宅く

「・・・ただいまあ」

もうすぐ日にちが変わるという時間帯。アントーニョの家で酒を飲んでたらこんな時間・・・早く帰ろうとすると泣きやがるし殴ろうとしても避けられるし、くっそ・・・付き合うんじゃない。今度は絶対に断ってやる。なんて意気込みつつ玄関のドアを開ける。そう、早く帰りたい理由は家にある。馬鹿弟のためではない。

「まーお」

お帰りと言っても言うように、玄関にじっとしている猫・・・そう、コイツのためだ。にしても待っててくれたのか？悪い事したな・・・やっぱりアントーニョ殴ろう。

「まお」

少し身震いしながら、俺にすり寄ってきた・・・チクショー可愛すぎるだろう・・・！！

「・・・」

思えば事の発端は、馬鹿弟がコイツを拾ってきた時から始まった。アーサーに似ていたから、ちょっと・・・いや物凄くビビったし、

元の場所に返してこいと言おうとした自分もいる。・・・が、今では可愛い同居人だ。

「フェリシアーノはどうした？」

「なーう」

案の定、寝室を見ると気持ちよさそうに寝息を立てて馬鹿面で眠っている弟。このやろー、兄貴の俺を差し置いて寝る奴があるかよ・・・。

「・・・まあ、いいか」

今更何言ったって変わるもんでもねえし。

「まお？」

「アルトウーロ、起こしておいて言える事でもねえけど、早く寝ろよ。明日はマツチョジャがいもが来るらしいな」

アルトウーロの頭を軽く撫で、酔いで頭痛のする頭を押さえながら自分の寝室に向かう。・・・二日酔い決定じゃねえか、あの腐れトマト野郎、後で覚えていやがれ。

「にやう、にやう」

「一緒に寝るか・・・」

「まお」

この頃、フェリシアーノがアルトウーロ独占だったからな！今日ぐらいは文句言わせねえよ。俺だって・・・コイツの飼い主だし・・・。

「寝るぞ」

「みやう！」

第二話（後書き）

二話目、ロヴィーノって絶対猫とか好きそうなイメージがあります。単にこの一人と一匹が書きたかっただけです。すみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7656x/>

ヘタリア猫話 ？

2011年11月17日19時36分発行